

昭和のメディアにあらわれたイントネーション

—ニュース映画のナレーションを中心に—

山田彩子

〔抄録〕

ニュース映画を中心に、昭和のメディアにあらわれたイントネーションについて検証した。その結果、次のことがわかった。アナウンサーによるナレーションは、時代と共に大きく変化している。しかし、談話はあまり変化していない。

本稿では、イントネーションを、聴覚による「聞こえ」と、コンピュータで計測した。計測の結果、昭和のメディアには四種類のイントネーションがあらわれていることが確認できた。四種類のうち一種類は、通常の談話に使用されるイントネーションである。あとの三種類は、談話にはあまり使用されず、むしろアナウンサーのナレーションや、特殊な状況下での談話にあらわれていた。

イントネーションの変化の要因についても考えた。主に社会情勢を背景にした制作側の事情で、ナレーションのイントネーションが変化してきたという結論に達した。

キーワード イントネーション、メディア、ナレーション、日本ニュース、ピッチ曲線

はじめに

メディア作品にあらわれた、ナレーションのイントネーションを検証することが、本稿の目的である。古いメディア作品を視聴すると、ナレーションの音声に特徴があることに気づく。一方、同じ作品に収録された談話は、ほとんどの場合、現在のものと大差ない。談話が変わらず、ナレーションが変わったように聞こえる理由は、イントネーションにあると、筆者は仮説を立てた。イントネーションを計測し、ナレーションのイントネーションが時代によってどう変化したかを検証した。あわせて、その背景についても考えた。

古いメディア作品は手に入りにくいだが、1999年に、昭和のニュース映画やラジオ・テレビ番組の音声をもとめてCD化した『音の日本史第2巻昭和』⁽¹⁾が、山川出版から発売された。その収録作品のうち、昭和20年までのすべての作品、ならびに昭和20年以降の作品の一部、そしてニュース映画「神奈川ニュース」ダイジェスト版ビデオの一部のイントネーションを、聴覚による「聞こえ」で測定した。また作品から音声言語だけを取り出して、コンピュータで分析した。

1. 昭和の音声メディア

メディアとイントネーションの関係を検証する前に、まず日本の音声メディアの歴史について、簡単に触れておきたい。

日本のマスメディアに音声が入力されたのは、概ね大正末期から昭和初期にかけてである。初期の音声メディアとしては、ラジオ放送、トーキー（音声入り映画）、レコードの3種があげられる。

NHK東京放送局でラジオ本放送が開始されたのは、大正14年（1925年）のことだった（『日本放送史』⁽²⁾）。初の国産レコードが発売されたのは明治42年（1909年）だが、昭和3年（1928年）に日本初の流行歌レコード「君恋し」が発表され、日本にレコード文化が定着する（『日本流行歌史』⁽³⁾）。日本初の本格的トーキー映画「マダムと女房」は昭和6年（1931年）に制作された（『日本映画史100年』⁽⁴⁾）。映画は、ドラマだけでなくいわゆるドキュメンタリーの分野にも参入した。無声映画時代から、戦地の様子を紹介するドキュメンタリー映画は人々の関心を集めていた。トーキー誕生後の昭和9年に、朝日、毎日、読売の新聞3社が、それぞれ映画社を設立し、ニュース映画制作に参入した。この3社は昭和15年に、社団法人日本ニュース映画社として統合され、昭和16年には「日本映画社」（略称「日映」）と改称された（『国策映画・日本ニュース小史』⁽⁵⁾）。なお、現在は著作権上などから、日本ニュース映画社創設以前の新聞3社による作品の一部も、音声二次使用時には「日本ニュース」としてまとめられている。

日映は、国民の戦意高揚を目的とした、いわゆる「国策会社」だった⁽⁶⁾。第二次世界大戦終結後、戦意高揚を目的とするニュース映画は、当然のことながら作られなくなり、ニュース映画自体も制作本数が減った。

ニュース映画に代わって、音声と映像が同時に楽しめるメディアとして登場したのが、テレビである。テレビ本放送は、昭和28年に始まった（『日本の放送のあゆみ』⁽⁷⁾）。テレビ放送開始当初、テレビ番組はニュース映画同様、テレビ受像機の前に集まった多くの人たちに観賞されることが多かった。その後受像機が普及したことなどにより、テレビ番組は少人数または一人で観賞されるようになり、現在に至っている。

2. 音声メディアにあらわれた四種類のイントネーション

それでは、音声メディアにあらわれたイントネーションについて考えてみたい。昭和のニュース映画やラジオ・テレビの音声をまとめてCD化したものに『音の日本史第2巻昭和』がある。この中に、四種類の特徴的なイントネーションがあらわれる。

- ① まるで絶叫するかのような、高音のみで構成されるもの。太平洋戦争終結前のニュース映画に多い。

(例3) ○

○○○○○
○○○○ ○
ほんじつは せてんなり

アクセントとイントネーションの関係で考えると、絶叫調と教育勅語奉読調はアクセントを破壊しており、文節読み調と会話調はアクセントに忠実である。

イントネーションとアクセントの関係を図に示すと、次のようになる。



3. ピッチ曲線とイントネーション

近年、談話などのイントネーションの分析には、ピッチ曲線が用いられることが多い。ピッチ曲線とは、音声言語を、音声分析ソフトを用いてコンピュータ解析し、高低関係を曲線であらわしたものである。ところが、戦前のニュース映画のナレーションは、ほとんどが、バックグラウンド・ミュージックと同時に収録されているため、音声言語だけを取り出してピッチ曲線であらわすことは、現在の技術では難しい。そこで、『音の日本史第2巻昭和』に収録された、バックグラウンド・ミュージックを使用していない、ラジオ番組のナレーションや談話などにあらわれたイントネーションを、音声分析ソフト（杉スピーチアナライザー アニモ社）で解析してみた。

その結果、必ずしも典型的な例とは言い難いが、2.にあげた四種類のイントネーションに相当する曲線が抽出できた。絶叫調に近いと思われるものが図1、教育勅語奉読調に相当すると思われるものが図2、文節読み調に近いと思われるものが図3、会話調に相当すると思われるものが図4である。図1、図2は近衛首相（当時）の談話、図3はラジオ番組中のアナウンサーによるナレーション、図4は松岡外相（当時）の談話に、それぞれあらわれたものである。図1、図2は紀元2600年記念式典での談話、図3は二・二六事件の際の放送、図4は三国同盟成立時の談話にあらわれた。

4. 自然な談話のイントネーション

ここで、日本語イントネーションは、どのように定義され、どのような特徴をもっているかを見てみたい。『国語学大辞典』⁽¹¹⁾は、日本語イントネーションの「高さの変動」を、「大体の

ところ (略) 四段階によく収まるようである」としている。『国語学研究事典』⁽¹²⁾は、イントネーションを「話者の中で話し手の主観を表わす声の高さの変動」としている。つまり、談話においては、話者の主観がイントネーションにあらわれるということである。

「談話におけるポーズとイントネーション」⁽¹³⁾で、杉藤美代子は、

発話節のイントネーションは、発話の始めが高く終わりは比較的低くなる傾向がある

とし、「強調とイントネーション」⁽¹⁴⁾で、郡史郎は

東京語ではフォーカスのある語は語アクセントによる音調の山が高くなり、以後の語群はアクセントによる音調の山が抑えられる

とした。『英語コミュニケーション論』⁽¹⁵⁾は、イントネーションを「周辺言語 (paralanguage)」に属し、「対面相互作用において、ある機能を果たす」としている。

5. 本稿におけるイントネーションの計測、表記

3. で述べた通り、バックグラウンド・ミュージックと同時に収録されている音声言語を、ピッチ曲線で分析することはできない。そこで本稿では、ナレーションのイントネーションを主に「聞こえ」で分析し、おたまじゃくし方式で表記することにした。

しかし、「聞こえ」による分析には、限界がある。通常四段階に収まるイントネーションを、聴覚で正確に計測するのは、困難である。なぜなら、四段階の音の高さが、順に上昇、または順に下降しながらあらわれることはきわめて稀であり、時間の経過を経て、ばらばらにあらわれる四段階の音が、それぞれ四段階のどの高さに相当するかを聞き分けることは、不可能に近いからである。2. の「会話調」④ (例1) では、「ほんじつ」の「ほ」と、「せいてん」の「いてん」は共に高音であるが、高さは異なる。しかしそれらの高さが異なるかどうかを聞き分けるのは、現実には難しい。そこで、本稿では便宜上、次のような音の高さの段階が確認できることを、自然なイントネーションに近いものがあらわれている目安と考えることにした。

2. の「会話調」④ (例2) 「ほんじつは せいてんなり」では、「ほんじつは」の「は」から、「せいてん」の「せ」「い」にかけて各モーラが、順に上昇する。同じ例文を、語アクセントだけに忠実に、一種類の高音と一種類の低音で発音すれば、「は」と「せ」は同じ高さで発音されるはずであり、その結果「文節読み調」のイントネーション③があらわれるはずである。しかし平板型アクセントの語である「せいてん」にフォーカスがあれば、この語の高音部分である「いてん」を特に高く発音することになり、その準備として、同じ語の語頭「せ」から高めに発音すると考えることができる。その結果、前の文節末の「は」より、フォーカスのある語の語頭「せ」の方が高く発音されるのである。つまり、④ (例2) には「は」「せ」「い」と順に上昇する段階で、中間音「せ」があらわれるのである。ここであらためて、(例2) の中間音を、●で表記することにする。

(例 2') ○ ○○○○
 ●
 ○○○○ ○
 ほんじつは せいてんなり

中間音●の出現は、自然なイントネーションの目安のひとつになると考えられる。

また、④(例3)では、本来「せいてん」において高音で発音されるはずの「いてん」が、上昇していない。「本日」にフォーカスをおくと、「フォーカスのある語は語アクセントによる音調の山が高くなり、以後の語群はアクセントによる音調の山が抑えられる」という郡の説に拠ったものである。ここであらためて、フォーカスの影響で音調の山が抑えられる音を◎で表記することにする。

(例 3') ○ ○○○○○○
 ○○○○ ○
 ほんじつは せいてんなり

非上昇音◎の出現も、自然なイントネーションの目安のひとつになると考えられる。

6. 絶叫調のイントネーション

それでは、昭和のメディアにあらわれた「絶叫調」のナレーションの具体例をみてみたい。

『音の日本史第2巻昭和』に収録された昭和12年の「日本ニュース・南京入城と『国民政府を相手とせず』」は、音の高低がほとんどなくアクセントを無視したナレーションで構成されている。冒頭部分の原稿は次の通りである。

かくて蔣政権の牙城・南京目指して怒涛の如き進撃を開始した無敵皇軍は
 はじめの部分のイントネーションを「聞こえ」で計測したところ、次のようになった。

○○○ ○ ○○○○○○ ○○ ○
 かくて しょうせいけんの がじょう

このあとも、ほとんど音の高低が無いナレーションが続く。

ところで、昭和19年に、日本で初めての本格的アクセント辞典と言うべき『標準日本語発音大辞典』⁽¹⁶⁾が発行された。この辞典は、アクセントの高低を「上」「中」「下」で表わし、「かくて」のアクセントを「頭高」、「がじょう」を「下中中型」としている。相対的な高さで見れば、「下中中型」は平板型に相当する。「かくて」「がじょう」を『標準日本語発音大辞典』のアクセントに従っておたまじゃくし式で表記すると次のようになり、「日本ニュース」とは違っていることがわかる。

○ ○ ○
○○ ○
かくて がじょう

「はしがき」によれば、『標準日本語発音大辞典』は昭和13年に起稿された。つまり『標準日本語発音大辞典』は「日本ニュース・南京入城と『国民政府を対手とせず』」が制作・上映された直後から準備されていたことになる。「日本ニュース・南京入城と『国民政府を対手とせず』」のアクセントは、当時の基準である『標準日本語発音大辞典』からみて、誤ったものである。

NHK関係者によれば、戦前のニュース映画のナレーションには、多くの場合NHKアナウンサーが起用されたということである。アナウンサーが、あえてアクセントを壊して表現するには、理由があるはずだ。この場合、アクセントを壊すことが目的だったとは考えにくく、むしろ特殊なイントネーションが、「話し手の主観を表わす」(『国語学研究事典』)ことや、「対面相互作用において、ある機能を果たす」(『英語コミュニケーション論』)ことを目的としてあらわれたと考えられる。

図1のピッチ曲線を、もう一度見てみたい。この図は、紀元2600年式典における万歳三唱の時のものである。語頭と語末のピッチが多少低いものの、1モーラ「ば」と、2モーラ「ん」の周波数の差が約40ヘルツと、図2、図3、図4の高低差にくらべて、きわめて小さい。図1は、「日本ニュース・南京入城と『国民政府を対手とせず』」にあらわれたイントネーションに、よく似ている。

この番組が録音された式典会場には、大勢の聴衆が集まっていた。図1の後に聴衆の「万歳」の声が続くことから、図1の発話には、聴衆の唱和を誘導するという目的もあったと考えられる。絶叫調のイントネーションは、語アクセントを破壊している。また絶叫調のイントネーションで表現された作品や談話からは、フォーカスのある語を判定することができない。そのため絶叫調のイントネーションは、一語一語または文全体の意味を、聞き手に瞬時に理解させるという点では、機能が劣る。そのかわり、観客の情感に訴えて万歳を唱和させるという点では、機能が勝っていたと考えられる。

絶叫調のイントネーションが、ニュース映画にあらわれた背景について考えたい。「国策映画・日本ニュース小史」には、日本が敗戦色を強めた昭和18年頃の、日映と検閲当局の、ナレーション演出に関するせめぎあいについての記述がある。

戦局が(略)一億総決起の守勢に転じると、検閲は神経質になりはじめた。日映の編集当事者は(略)現実を客観的に国民に伝える意図で「勝利の進撃」時代の、やや有頂天な調子(時に絶叫調)を、感情を現さぬものに徐々に変え(略)‘聖戦’へのひそかな批判を試みるようになった。しかしそのささやかな抵抗を検閲当局も見逃さなかった。(略)日映当事者が淡々たるコメントを、淡々とアナウンサーにしゃべらせると、怒って国民を「泣かせろ」と要求し、悲哀なコメントを感傷的にさせよと録音のやり直しを命じた。

絶叫調のイントネーションは、はじめは制作側の、後には検閲側の、一種の演出だったのである。

7. 教育勅語奉読調のイントネーション

次に、教育勅語奉読調のイントネーションの具体例を見てみたい。図2は、各文節の1モーラ目が低音、2モーラ以降がすべて高音で発音されている。低音と高音の周波数の差は、図1にくらべて大きい。このようなイントネーションを、原口庄輔は『現代の英語学シリーズ3音韻論』「第4章音調とイントネーション」⁽¹⁷⁾で、高音Hと低音Lを用いて表記し、「LH音調」と名付けて、次のように述べた。

チンオモウニ ワガコース コース
L H H H H H L H H H H L H H

これも、基本音調メロディーを無視し、LH音調を導入したものである。

紀元2600年記念式典における、近衛の談話にあらわれた図2は、原口の指摘したLH音調に相当する。

図2にはじまる近衛の談話の、冒頭部分の原稿は次の通りである。

本日この式典を挙ぐるに際し、天皇陛下・皇后陛下の臨席まことに忝く
近衛はこの中で、「てんのうへいか」を、次のような平板型のアクセントで語っている。

○○○○○○
○
てんのうへいか

『標準日本語発音大辞典』は、「てんのうへいか」のアクセントを「中高型」としている。ここで、作品とイントネーションの関係を筆者がまとめた、図5を見てみたい。近衛は、昭和15年の作品「日本ニュース・三国同盟の成立」では、会話調イントネーションで語っている。この中で近衛は標準語アクセントを用いていることから、本来近衛は標準語話者であったと考えられる。何らかの理由がなければ、標準語話者が、わざわざ標準語アクセントを崩すことはないはずだ。近衛が図2で、「てんのうへいか」を、平板型で発音した理由は、教育勅語奉読調のイントネーションを、彼が通常用いていたはずの標準語アクセントよりも、優先させたためと考えられる。

図1と図2は、同一の話者・近衛によって、紀元2600年記念式典という同一の場で語られた。この場で近衛が、誰を主な聞き手、言い換えれば意識すべき方向として想定していたか、考えてみたい。この場には、近衛にとって意識すべき方向が、少なくとも二つはあったはずだ。一方に天皇・皇后が臨席し、もう一方には万歳三唱にこたえる聴衆がいたのである。つまり近衛は、二種類の聞き手を意識していたことになる。図1のイントネーションは聴衆を聞き手として意識し、万歳を誘導するものだった。図2のイントネーションは、この式典に臨席した天

皇・皇后を意識した結果、あらわれたものと言えよう。話者の意識の方向性によって、二つの種類の特殊なイントネーションがあらわれたのである。

教育勅語奉読調は、アナウンサーによるナレーションにもあらわれる。図5に示した昭和15年の「日本ニュース・三国同盟の成立」のナレーションは、教育勅語奉読調である。金田一は、「コトバの旋律」で「日本ニュース」の「蔭の声」などにあらわれる教育勅語奉読調のイントネーションを、

こういう調子をもちいることによって、画面の荘重な気分を有効に表現しているとした。つまり、作品の演出意図が、特殊なイントネーションにあらわれたということである。

ビデオ化された「日本ニュース」は、ほぼ全編が川崎市民ミュージアムに保管されているが、第二次世界大戦終結前のアナウンサーのナレーションには、アクセント破壊型に属する、絶叫調ならびに教育勅語奉読調のイントネーションが多くあらわれている。その一方で、戦前・戦中の作品でも、生活に密着した作品（例 昭和16年6月17日号「135億円貯蓄運動に壁新聞」など）には、アクセント忠実型のイントネーションがあらわれることが多かった。「荘重な気分」など、日常とは異なる場面を効果的に演出する時、教育勅語奉読調のイントネーションがあらわれたのである。

8. 文節読み調のイントネーション

文節読み調について、具体的に見ていきたい。図3は、2・26事件に参加した兵士に対して、アナウンサーがラジオから呼びかけたものである。このナレーションは、アクセントに忠実に発音されている。しかし自然な会話のイントネーションとは違って聞こえる。図3の前後を含む原稿は、次の通りである。

お前達は、上官の命令を正しいものと信じて

図3では、上官の「じょ」と、命令の「め」に、約200ヘルツという、ほぼ同じ周波数の低音があらわれている。各文節の低音部に、同じ高さの周波数による低音がくり返されるのである。

この文脈の中で「上官の命令を」と語る時、通常はどのようなイントネーションになるだろうか。「上官の命令を」はひとまとまりの句であるから、この句の中の被修飾語である「めいれい」の低音部「め」は、図3のように低くは発音しないはずだ。また、兵に対し、通常は従うべき「じょうかん」の意向に、あえて反して投降するよう呼びかけるといふ、特殊な内容から推測すると、通常は次のようになると想定される。

○○○○ ○○○○○

○

じょうかんの めいれいを

「じょうかん」にフォーカスをおくことで、次の「めいれい」の高音部「いれい」上昇が抑えら

れるのだ。

長谷川勝彦は、図3にあらわれるような読み方を「文節読み」⁽¹⁸⁾としたうえで、次のように「文節読み」を批判した。

文節の考え方には本来、センテンスの中の、単語どうしの「意味のかかり具合」の説明がないのです

そのうえで長谷川は、通常の会話にあらわれるイントネーションを観察して、

「花が咲いた」というときには、元のアクセントが変化して一語のようなアクセントになります。

と述べた⁽¹⁹⁾。図3は、「一語のように」ならず、「上官」と「命令」が別々に発音されたものと言える。

文節読み調のイントネーションは、長谷川の指摘の通り、図5の談話には一例もあらわれない。その一方で、文節読み調のイントネーションは、『音の日本史第2巻昭和』以外にも、ラジオ・テレビ番組やニュース映画などのナレーションには多くあらわれていた。昭和25年に制作・上映が開始された劇場用ニュース映画「神奈川ニュース」のダイジェスト版ビデオを検証したところ、昭和40年代前半までのナレーションは、大半が文節読み調だった。その後はほとんどの作品が、会話調に移行している。

文節読み調の背景について考えたい。図6は、昭和25年以来順次発行され、アナウンサーの教本として広く読まれている『アナウンス読本』⁽²⁰⁾の、標準語と、イントネーションの、項目の関係を筆者がまとめたものである。標準語の取り扱いが大きい時には、イントネーションの取り扱いが無い、または小さいことがわかる。標準語の項目は、昭和45年版では「共通語」と改訂され、昭和60年版では消失した。一方イントネーションに関する記述は、昭和37年版にはじめてあらわれ、徐々に大きな扱いになっている。標準語の記述が後退すると、イントネーションが大きく取り扱われるようになるのである。

図6から、次のことがわかる。長い間アナウンサーにとっては、標準語の担い手であることが最優先の職務だった。アナウンサーは、職業上標準語アクセントを強く意識する必要があった。一方イントネーションは、辞書に記せるようなものでないこともあり、制作現場であまり意識されてこなかった。標準語（共通語）の普及とともに、アナウンサーは、標準語の担い手という規範意識からやや自由になり、はじめてイントネーションを意識するようになったのである。

6. 7. で見てきたように、絶叫調と教育勅語奉読調のイントネーションは、演出という前提のもとで、結果的にアクセントを破壊した。一方、文節読み調のイントネーションの前提には、標準語アクセントという規範意識があり、その結果不自然なイントネーションがあらわれた。メディアのイントネーションは、社会情勢を背景にした演出や規範意識に干渉され、アクセントに対して、時には上位に、時には下位に置かれた。その結果、絶叫調・教育勅語奉読調・文

節読み調という三種類の、通常の談話にはほとんど使用されないイントネーションが、メディアのナレーションにはあらわれたのである。

9. 会話調のイントネーション

会話調のイントネーションの具体例を見てみよう。図4は松岡が三国同盟成立にあたって「この三国と」と語ったものである。「こ」「の」「さ」と、順に三段階にわたって音が上昇していることがわかる。これをおたまじゃくし方式で表記すると、次のようになる。

○
● ○○○○
○
この さんごくと

中間音●があらわれていることから、この談話は会話調で語られていることがわかる。

ここでふたたび、図5に注目したい。図5の談話は、「紀元2600年式典」における近衛のもの以外は、会話調だった。一方ナレーションに会話調があらわれるのは、昭和20年を待たなければならない。「沖縄戦」「原爆投下」という非常に深刻な事態を報道するにあたって、「国策会社」日映が制作するニュース映画にも、はじめて会話調があらわれたのである。8.で述べた通り、その20数年後の昭和40年代後半には、会話調のナレーションがようやく定着した。

おわりに

メディアにあらわれたイントネーションについて、ニュース映画のナレーションを中心に検証してきた。アナウンサーによるナレーションは、時代によって大きく変化していることが確認できた。ナレーションのイントネーションが変化した理由は、語り手個人の事情によるものではなく、主に、社会情勢を背景とした制作側の事情によるものだった。

ナレーションとは、あらかじめ用意された原稿を、語り手が音声で表現するものである。原稿はほとんどの場合、語り手以外の制作者が書いている。他人が書いた原稿を語るにあたって、語り手は、作品の内容と真摯に向き合ったり、演出意図を納得したりしなくても、原稿を音声化することができる。その結果、通常の談話にはあらわれないような特殊なイントネーションが、ナレーションにはあらわれたのである。

ナレーションのイントネーションは、現在、聞き手への語りかけを意識した自然な会話に近いものになってきている。語り手、聞き手と作品に真摯に向き合うという姿勢が、メディアのナレーションから今後も失われることのないよう、筆者は願っている。

〔注〕

- (1) 『音の日本史』山川出版社マルチメディア研究会 寺尾隆雄・飯山昌幸・渡邊哲雅監修 1999年、山川出版社
- (2) 『日本放送史』別巻 日本放送協会編 1965年、日本放送出版協会
- (3) 『日本流行歌史』〈戦前編〉古茂田信男他編 1981年、社会思想社
- (4) 四方田犬彦『日本映画史100年』 2000年、集英社
- (5) 瓜生忠夫「国策映画・日本ニュース小史」『別冊一億人の昭和史 日本ニュース映画史』1977年、毎日新聞社
- (6) 同上
- (7) 日高一郎『日本の放送のあゆみ』 1991年、人間の科学社
- (8) 金田一春彦「コトバの旋律」『国語学』五輯 1951年（後に『日本の言語学第二巻音韻』に収録）
- (9) 長谷川勝彦『メディアの日本語 音声はどう伝えているか』2000年、万葉舎
- (10) 『言語学大辞典』1996年、三省堂
- (11) 『国語学大辞典』1980年、東京堂出版
- (12) 『国語学研究事典』1977年、明治書院
- (13) 杉藤美代子「談話におけるポーズとイントネーション」『講座日本語と日本語教育2 日本語の音声・音韻（上）』1989年、明治書院
- (14) 郡史郎「強調とイントネーション」 同上
- (15) F. Lobo、津田葵、楠瀬淳三『英語コミュニケーション論』第2章「非言語の伝達」1984年、大修館書店
- (16) 『標準日本語発音大辞典』寺川喜四男・日下三好 1944年、大雅堂
- (17) 原口庄輔「音調とイントネーション」『現代の英語学シリーズ3 音韻論』第4章 1994年、開拓社
- (18) 長谷川勝彦『メディアの日本語 音声はどう伝えているか』I-1 文節読みでは伝わらない 2000年、万葉舎
- (19) 長谷川勝彦『メディアの日本語 音声はどう伝えているか』I-2 わたしの一語理論 同上
- (20) 『アナウンス読本』NHK発行（後に『アナウンス・セミナー』と改称）

(やまだ あやこ 文学研究科国文学専攻修士課程修了)

(指導：山口 堯二 教授)

2004年10月15日受理

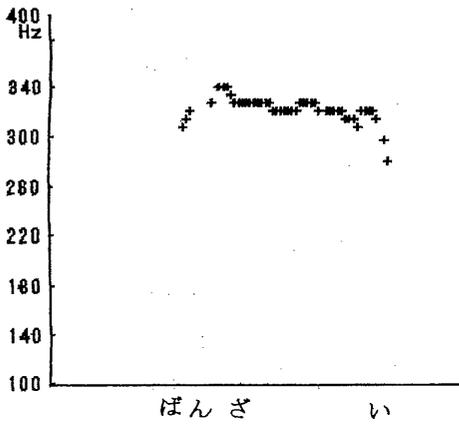


図1 NHKラジオ 昭和15年 近衛首相

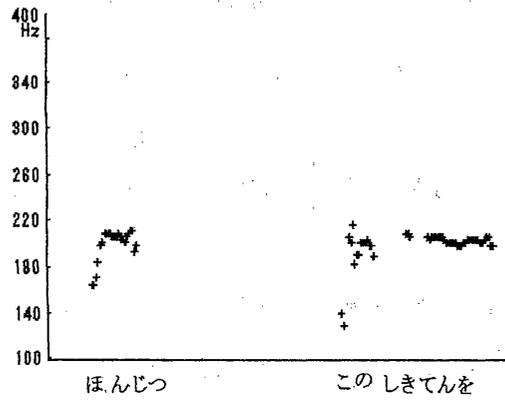


図2 NHKラジオ 昭和15年 近衛首相

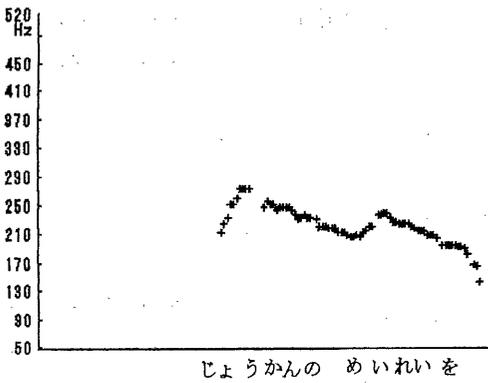


図3 NHKラジオ 昭和11年 アナウンサー

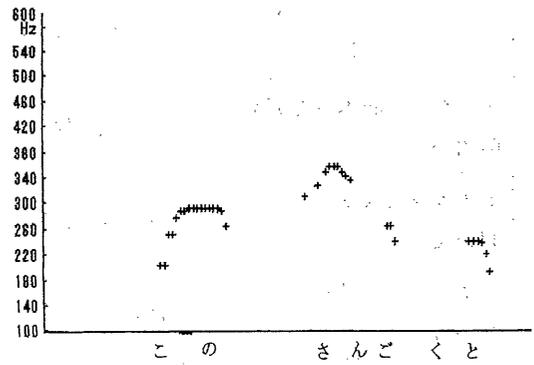


図4 日本ニュース 昭和15年 松岡外相

図5 『昔の日本史第2巻昭和』昭和20年までの収録作品のイントネーション

項目	年代	媒体・番組	種別	イントネーション
二・二六事件	昭和11年	NHKラジオ	ナレーション	文節読み調
南京城入城	昭和12年	日本ニュース	ナレーション	絶叫調
			談話(風見局長)	会話調
三国同盟の成立	昭和15年	近衛氏のみ初め NHK、後に全編 日本ニュース	談話(近衛首相)	会話調
			ナレーション	教育勅語奉読調
			談話(松岡外相)	会話調
紀元2600年式典	昭和15年	NHKラジオ	談話(近衛首相)	教育勅語奉読調 絶叫調
貴金属の供出	昭和15年	日本ニュース	ナレーション	文節読み調
太平洋戦争開戦	昭和16年	NHK臨時ニュース	ナレーション	混在
沖縄戦	昭和20年	日本ニュース	ナレーション	会話調
原爆投下	昭和20年	日本ニュース	ナレーション	文節読み調 会話調

図6 『アナウンス読本(アナウンス・セミナー)』における標準語とイントネーションの取り扱い

書名 発行年	発行所	標準語の項目 章(部)	イントネーション についての記述
アナウンス読本(非売品) 昭和25年	日本放送協会	第一部	なし
アナウンス読本 昭和30年	日本放送出版協会	第一章	なし
新アナウンス読本 昭和37年	日本放送出版協会	第一章	あり(疑問、断定など 5種のみ)
NHKアナウンス読本 昭和45年	日本放送出版協会	I(「共通語」 の表記)	あり(やや詳しい)
NHKアナウンス・セミナー 昭和60年	日本放送出版協会	なし	あり(広義的な捉え方 で詳しい)